

風疹 (ふうしん)

風疹は、1990年代前半まで5～6年ごとに大規模な全国流行がみられていました(1976、1982、1987、1992年)。男女幼児が定期接種の対象になってから、大規模な全国流行は一時見られなくなりましたが、2004年と2012～2013年にかけて大規模な流行となり、先天風疹症候群の赤ちゃんが、それぞれ10人と45人診断されました。

今回は、最近流行をみせる風疹について解説します。



症状

風疹ウイルスは、患者さんの飛沫によって感染し、2～3週間の潜伏期間の後、発熱、発疹、耳介後部や頸部のリンパ節腫脹が出現します。症状は麻疹に比して軽症で、発熱も患者の約半数にみられる程度です。

ウイルスの排泄期間は、発疹出現の前後約1週間といわれています。また、感染しても、15～30%の人は症状が出ない、不顕性感染となります。

基本的には予後良好な疾患ですが、高熱が持続したり、血小板減少性紫斑病(3,000～5,000人に1人)、急性脳炎(4,000～6,000人に1人)などの合併症により、入院が必要になることもあります。

成人では、手指のこわばりや痛みを訴えることも多く、関節炎を伴うこともあります(5～30%)が、そのほとんどは一過性です。



先天風疹症候群

風疹に伴う最大の問題は、妊娠20週頃までの妊婦が感染したことにより、胎児に先天異常を含む様々な症状を呈する先天性風疹症候群が出現することにあります。

先天異常として発生するものとしては、先天性心疾患、難聴、白内障、色素性網膜症などがあります。それ以外の症状としては、低出生体重、血小板減少性紫斑病、溶血性貧血、黄疸、間質性肺炎、髄膜脳炎などが挙げられます。

また、進行性風疹全脳炎、糖尿病、精神運動発達遅滞などが見られることもあります。

予防

風疹に対する特異的な治療法はなく、症状を和らげる対症療法のみです。したがって、予防することが最大の治療法となります。

年齢別の風疹ワクチン接種状況は、表に示すとおりで、1962年4月2日～1979年4月1日以前生まれの男性は抗体検査が必要で、1979年4月2日～1990年4月1日生まれの男女はワクチン接種率が低いので、抗体検査を受けることが望ましいと考えます。

年齢別風疹ワクチン接種状況		
	男性	女性
1990 (H2) 年 4 月 2 日以降生まれ	2回個別接種	
1987 (S62) 年 10 月 2 日～ 1990 (H2) 年 4 月 1 日生まれ	幼児期に1回個別接種	
1979 (S54) 年 4 月 2 日～ 1987 (S62) 年 10 月 1 日生まれ	中学生時に1回個別接種	
1962 (S27) 年 4 月 2 日～ 1979 (S54) 年 4 月 1 日生まれ	接種なし	中学校で集団接種
1962 (S27) 年 4 月 1 日以前生まれ	接種なし	

予防接種を受けたことが記録で確認されていない場合も、まず抗体検査を受けることをお勧めします。そして抗体が無い場合は、なるべく早くワクチン接種をしましょう。

過去に風疹にかかって、既に免疫を持っていたとしても、予防接種を受けることによって特別な副反応などの問題が起こることはありません。

それよりも、予防接種を行うと、風疹に対する免疫をさらに強化する効果が期待できるので、より安心です。

岐阜市では、平成30年4月1日～平成31年3月31日の期間で、

- ・岐阜市に住民登録がある方
- ・今までに風疹にかかったことがない、風疹ワクチン(麻疹風疹混合ワクチンを含む)を接種したことがない、風疹の抗体検査を受けたことがない方

上記のすべてに該当する、30歳以上60歳未満の男性を対象に、無料で風疹抗体検査を実施することになりました。詳しくは院内掲示をご確認ください。

